

ママ活アプリで

不倫チンポ漁りにドハマリした

普段は聖母のようなお母さん

犬文庫 024

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。

また、登場人物は全員十八歳以上です。

「はい、あなた。コーヒーですよ」

「ありがとう、梨奈」

夕食の後。リビングのソファで本を読みながらくつろぐ田口進次郎の元に、妻の梨奈がホットコーヒーを運んでくれる。早速一口喉に通し、その熱さと深みが胃袋に広がるのを堪能する。贅沢な一瞬だった。

「お、お母さん…そ…その…」

そこへ、息子の祐輔がやってくる。勿論夕食は家族四人みんなでこのリビングで取ったが、食後のこの時間、息子と娘は自分達の部屋に戻って過ごしていた。その息子が再びリビングに現れたのだった。そしてなにやらやけにもじもじしている。普段から気が小さく大人しい男の子ではあるが、明らかになにか言い出しにくいことがある様子。そう言えば、食事中から今日の祐輔は少し変だった気がする。

進次郎が様子を窺っていると、妻の梨奈が、まるで全てを見通しているかのように息子に言うのだった。

「ふふふ…祐くん♪体操着、破いちゃったこと気にしてるのかな？」

「はあ！ご、ごめんなさい、お母さん！き…気がついたら破けちゃってて！その！」

「ううん、いいのいいの。お母さん、なにも怒ってなんかないよ？それに、もうちゃんと縫って直しといてあげたから、なにも心配しなくてもいいんだよ、祐くん」

「ほ、ホント？ありがとう、お母さん！」

「うん♪いいのよ。…でも、これからは、もしこういうことがあったら、勇気を出してすぐお母さんに言うようにしようね？お母さん、絶対怒ったりしないから♪」

「うん、わかった！…ごめんなさい、お母さん！」

リビングに来た時はとても気がかりそうで

心配になるくらいだった祐輔は、晴れやかな顔に一変して自分の部屋に戻っていった。

すると今度は入れ替わるようにして、娘の萌夏が夫婦の前にやってきた。宿題なのだろう、萌夏は学校の問題集を手にしていた。

「ねえねえ、お母さん。もえちゃん、わからない問題があるの。教えて教えて〜♪」

「ふふふ、いいよ〜♪もえちゃんはどこがわからないのかな〜?」

とても可愛らしい娘のおねだりを、母は微笑を浮かべて優しく受け止める。

「あ、もえちゃんはここがわからないんだね? うんうん、もえちゃんこのパターン苦手だもんね。いい?ここは、こうやってね…」

「うう…:ことう?」

「そう…:それで…:ことうするの…:」

「あ、ホントだ!解けた!もえちゃん、わかった!」

「偉いね、もえちゃん。すぐわかっちゃったね♪」

「うん！もえちゃんは、とつても偉い！」

「うふふ♪」

「……………」

微笑ましい母娘のやり取りを、ソファアに掛けた進次郎は黙ってじっと眺めていた。夕食の準備にその後片付け、そして夫のコーヒーの用意と、疲れてしまっていたっておかしくはないはずなのに、妻はそんな様子は微塵も見せず、慈愛に溢れた表情を娘に向けるのだった。

進次郎の妻は、いつだってこんな調子だった。夫の注文にも、子供達の要求にも、文句一つ言うことなく必ず笑顔で応える。

まるで、聖母。彼女を形容するには、その表現が最も適していた。それは決して大袈裟ではないと進次郎は本当に思う。

髪は飾りっ気のないシンプルな黒髪ストレ

トのロングヘア。結婚してから十年以上経つが、その間それを大きく変化させようとすることが一度もないのが、彼女の質素で控え目な内面を如実に表していた。目鼻立ちの造形は全体的に柔らかく、温和な性格が滲み出るようで、他人を嫌な気にさせない、周囲をほっこりさせるタイプの美人である。

百七十センチに近い高身長は、そんな彼女のイメージとは合わず、若干アンバランスなのかもしれない。決して無駄に太っているわけではないが痩せ型でもなく、単純に大柄といえらると思う。なんだあのデカイ女と、口さがない連中は言うのかも知れない。

だが進次郎にはそんな些細なことは全く気にならなかつた。いやむしろ、そんなギャップのある見た目もとても可愛らしく思えて心底愛おしい。この妻は今年で四十一歳になるが、十以上歳上の進次郎を好いてくれて、今日まで

ついてきてくれた。もっと歳の近い良い男と付き合うチャンスだっただろうに。

「……………」

妻と娘の平和な触れ合いを見ながら、進次郎はなんだか感極まってしまう。こんな日常のページからさえも、彼の妻は万感の幸せを実感させてくれるのだった…。

やがて娘も部屋に戻り、再びリビングに二人きりになると進次郎は言ってしまう。言わずにはいられなかった。

「…梨奈…君は本当に聖母みたいだな」

「へっ！せ、聖母？わ、私ですか？」

「…いつもありがとうな。君には本当に感謝しているよ」

「え？ど、どうしたんですか、あなた、急に？」

「いや…本当に梨奈と一緒にになってよかったなって思ってた」

「…あなた…ふふふ…私も同じ気持ちです」

よ？私も…あなたの妻になって本当によかったです」

正に聖母の微笑みを、妻は向けてくれる。

「…梨奈」

「…もう、やだ！恥ずかしいですよ！あ、そうだ！お風呂用意しなきゃ。あつたかい内に入ってくださいね♪」

そしてまた、夫のために動き出す。進次郎は、この幸せを絶対に手放すまいと、固く誓うのだった。

※※※

「祐くんも、もえちゃんも、ハンカチもティッシュもちゃんと持つてるよね？大丈夫だよ
ね？」

進次郎の目の先。三人の家族は玄関にいた。妻は息子と娘にハンカチとティッシュをわざわざポケットから出させて、しっかりとチエツクする。

「うん。ちゃんと持ってるよ、お母さん！」

「もえちゃんも！」

「よし、OK！じゃあ二人とも行ってらっしゃい！車に気をつけるんだよ？」

最後に儀式のように、最愛の二人の頭を念入りに優しく撫で、妻は子供達を送りだす。

「はい！行ってきまあす！」

「もえちゃんも行ってきまあす！」

平日朝の恒例の景色を、進次郎は少し離れて幸せな気持ちで見っていた。やはり妻は聖母なのだど、一人納得しながら。

学校に出発した息子と娘からわずかに遅れて、進次郎も玄関で靴を履く。そのままそこにいた妻が、息子達に接するのと同じ感じで、少

し歪んだネクタイを直してくれる。

「：はい。綺麗になりました♪あなた、いつてらっしやい。気をつけてくださいね」

「うん、ありがとう。いつてくる：」

「はい♪：：あれ？どうしました、あなた？」

妻は不思議そうな顔で小首を傾げる。いつてくると言った夫が、その場から一向に動こうとしないのだから当然のことだった。

進次郎は言った。若干頬を赤らめて。

「いや：その：なんだ：久しぶりに、あれ：してほしくて：：なんだか今日：：すぐくそんな気分で：」

まるで要領を得ぬ口ぶりだったが、妻には一瞬でわかるらしかった。そして、恥ずかしそうにしながらも、夫の望みを叶えてくれる。

「もう：あなただったら：：じゃあ：はい：：チュツ」

梨奈は同じくくらいの身長の方の顔に唇を近

づけると、ほっぺに軽くキスをした。そして、改めて笑顔で言う。

「…いってらっしゃい、あなた♪」

「うん！いってきます！」

進次郎は意気揚々と玄関を出た。なにか若い頃に戻ったような気分で、全身にエネルギーが充満していた。今日もバリバリ働けそうだった。玄関のドアが閉まる。三人の家族はつつがなく出発し、そこには、この家の母である梨奈一人が残される。

「…………ふう」

梨奈の口から、息が漏れた。完全に無意識だった。それは傍から見れば、ため息と呼ばれるものなのかもしれなかった…。

※※※

専業主婦の田口梨奈は、家族のいない家で、自らの職務に従事する。掃除。洗濯。夕食の準備。そのための買い物。その様は、疑いようのない規範的なお母さんの姿に違いなかった。そんな風に家族のために働く妻の姿を見ても、きつと進次郎は聖母のようだと評したことだろう。

とはいえ、いくら彼女とてずっと完璧な聖母でいつづけるわけではない。一日の中には余暇もあれば、娯楽もある。梨奈は今、時間に余裕があるので、リビングのソファーに体をくつろがせ、スマホを触っていた。少々だらしなかったが、これくらいの息抜きならば、一般論として夫を幻滅させるほどのものでもないはずだった。

そのディスプレイを、見られない限りは…。

「……………」

梨奈はかじりつくようにして、熱心にスマホを操作する。専業主婦で、二人の子の母である梨奈のスマホには、今、とあるアプリが起動していた。

それは、俗にママ活アプリと呼ばれるものだった。

単純な出会い系アプリとは違い、大々的にママ活を謳ったもので、人妻や主婦など、一定以上の年齢の女性と、若い男性とのマッチングを目的とした、そのコンセプトに特化されたアプリだった。

システムはシンプルで、それぞれがアカウン
トを持ち、誰もが全体にオープンになったパブ
リックエリアでメッセージを公開したり、相手
を募集したりすることが出来る。そのままオー
プンなパブリックエリアで不特定多数の人と
話すことも出来るし、反対に閉じたプライベート
トエリアで二人だけでメッセージを交換する

ことも出来る。そしてパブリックエリアでもプライベートエリアでも、メッセージだけでなく、画像や動画をアップすることが可能だ。

細かいルールは特になく、ママ活だからといって必ずしも女性がイニシアチブを取ったり、お金を払ったりしなければならぬというわけではない。決まっているのは年上女性と年下男性でマッチングすること。それくらいだ。

「……………」

そのアプリを、主婦仕事の休憩中の梨奈は夢中になっていじっていた。彼女には夫もいるし、息子と娘もいるのに、だ。普段は聖母のようなお母さんなのに、だ…。

ひよんなことからネットでこのアプリの存在を知った。母親や主婦が、家族に隠れて挙つてこのアプリを利用しているという触れ込みだった。みんな偉そうなことを言つて、なんだかんだで、裏ではちやつかりそういうことをや

っているんだと…。最初は軽い気持ちだった。少し覗いてみるくらいのつもりだった。ただスマホにアプリを入れるくらい大丈夫だと。それくらいなら悪いことじゃないと。気がついたらドハマリしてしまっていた…。

外で実際に会うようなことはしていない。けれども最初はただ見ているだけのつもりだったのが、今では呆気なく、パブリックエリアで複数の男性となんの抵抗もなくメッセージで会話してしまっている。

そしてつい先日、一人の若い男性から、プライベートエリアで二人で話そうと提案された。初めてのことだった。そして梨奈は、簡単にそれに応じた。

「……ふふっ♪」

笑みがこぼれる。四十一歳のお母さん梨奈は、正に今、アプリ上で名前も知らない若い男性と、二人きりで会話していたのだった。

優しさと慈愛を体現する、長い黒髪と柔らかな相貌。まるで聖母のような外見の、彼女のその表情の奥には、今、普段家族には決して見せない妖美な色が、確かに蟠っていた…。

※※※

「ほい！一丁あがり！」

「わあい！いただきます！」

「わあ！もえちゃんも、いただきますあす！」

「おう！たんとお食べ！」

田口進次郎は、額の汗を拭った。日曜日。今日は妻の梨奈が留守で、昼食の用意は彼が担当した。こんなことは滅多にないことで、料理に慣れない進次郎にとっては一苦労だった。もつとも、料理といっても即席の袋ラーメンに、肉

と野菜を炒めてトッピングしただけなのだが
…。

日曜といえども、家族を置いて私用で外出することなんてほとんどない梨奈だったが、今日はどうしても古い友人と約束があるというこ
とで、申し訳なきそうにしながらも出かけてい
た。進次郎は、無論快く妻を送り出した。普段、
家族のために日夜尽くしてくれているのだ。時
には羽根を休めて然るべきだろう。その間子供
達の面倒を任されることを、進次郎はとても意
気を感じていた。

だから昼食の調理にも勢い込んで臨んだの
だが…。

「お父さん！このラーメン、あんまり美味しく
ない！」

「もえちゃんも！お母さんのご飯の方がい
い！」

「ガクツ」

残酷にも、子供達にはすこぶる不評なのだ。誰にでも簡単に作れる即席ラーメンのはずなのだが……。妻の偉大さを痛感せずにはいられなかった。

「ご、ごめんよ……。二人とも……。夕飯はお母さんが用意してくれてるから、昼ご飯はお父さんのので我慢してくれよ……。な？」

「うーん……。わかった！」

「もえちゃんも！」

「ははは……。ありがとう……」

そんなに遅くはならないと言っていたが、心配性の妻は念のため夕食を準備していつてくれた（昼食も自分が用意すると主張したがさすがにそれは進次郎がやめさせた）。なので進次郎としては、無理に夕飯の時間までに慌てて帰ってこなくていいと思っていた。今日は時を気にせず楽しんできてほしい。それくらい、普段妻には苦勞をかけているのだ。

(ゆっくりしてこいよ…梨奈…)

※※※

「こ…こんにちは…れ…レオンくん…ですよ
ね？」

「あ、梨奈さん？はじめまして」

「は、はじめまして…はあ…」

繁華街の駅前で、梨奈は待ち合わせした男性と、初めて顔を合わせた。第一印象は、アプリ上の写真で見た通り、とてもカッコいいというものだった。明るい茶系統の短い髪の毛、体型も顔の造形もとてもスマートな、爽やかイケメン。それが彼、レオンだった。横文字の名であるがそれはハンドルネームで、純正の日本人である。アプリ上で知り合っただけの、本名も知らな

い若い男性と、田口梨奈は今、会っていた…。
「あは♪梨奈さんめっちゃ美人じゃん！よかつた！大当たりだよ！あはは♪」

相手もやはり見た目のことを一番に考えるようで、梨奈を見てそんな風に言った。

「ほ：ホントですか？こ：こんな大きい女が来て、が：がっかりしたんじゃない？」

内心満更でもなかったが、梨奈は控え目にそう返した。二人の身長は同じくらいで、もう慣れていることだが、梨奈は微かにコンプレックスを刺激されずにはいられなかった。

梨奈はレオンと違って、アプリ上で見た目を明かしてはいなかった。下の名前は教えたが、苗字は言っていないし、重要な個人情報類は基本隠している。もしなにかの間違いで情報や画像などが流出して、家族の目に触れてしまうのは避けたかった。梨奈はその点は徹底して警戒していた。家族バレだけは、絶対に許されな

かった…。

「ううん、全然！背、高くてめっちゃ素敵じゃん！そんな謙遜することないよ！梨奈さんすげえ綺麗だから！マジ今日は会えて嬉しいよ、梨奈さん！」

会っていきなり真っ直ぐに目を見てそんなことを言われて、梨奈は思わずドキツとしてしまう。

「もう…やだ…こんなおばさんに向かって…なんか…本当にごめんなさいね…こんなおばさんと会ってもらっちゃって…本当…申し訳ないわ…」

「ふふっ！だからさつきから謙遜しすぎだつて！今日は俺が会いたくて誘ったんだからさ」
「でも…」

謙遜したくもなってしまう。梨奈は今日、出来るだけオシヤレに、若く見えるように、張り切ってやや派手な赤系のブラウスとタイトス

カートでビシツと決めてきたのだが、レオンはそれよりも遥かにオシャレな、若者らしいラフなストリート系のファッションで現れたのだから。

無理もない。梨奈は四十一歳。レオンは十九歳なのだ。二人の間には埋められない隔たりがあつて当然だった。

「もう！そんな辛気臭い顔してないで、ほらいくよ」

「あ…」

レオンはいきなり、梨奈の手を握ったのだ。そしてそのままその手を引っ張って歩いていく。

「……ゴクツ」

ここ数年はとんと感じていなかった種類のときめきが胸に溢れ、梨奈は唾を飲んだ…。

※※※

「…もうちよい…もうちよい…よし！オツケー！ゲット！」

「あは♪おめでとぅ♪」

二十以上も年下の男の子の隣で、梨奈は相手を崩して小さく拍手する。クレーンゲームで、レオンが小さなクマのぬいぐるみを見事吊り上げたのだった。

「ほい、これ梨奈ちゃんにあげるよ」

ファストフード店で軽く食事しながら会話を楽しみ、そしてこのゲームセンターでたっぷり遊ぶ内、いつの間にか彼からの呼び方が『梨奈ちゃん』に変わっていた…。

「え、いいの？じゃあ、遠慮なくもらっておくね。ありがとう、レオンくん。あは、可愛い♪」

それに呼応するように、梨奈の方も彼に対し

て完全にため口になっていた。普段、彼女は年上の夫に対して基本敬語で話すため、男性にこういうフランクな言葉遣いをするのは本当に久しぶりで新鮮で、梨奈は先程から妙な昂揚感に包まれていた。

「うん、どうぞどうぞ。あ、そうだ。俺、梨奈ちゃんとしたいことがあったんだ。ほら、こっち。来て来て」

「えくなに〜？なんか怖いんじゃないよね？おばさん、怖いのはやあよ♪」

「ふふ、大丈夫大丈夫」

レオンは、当然のように梨奈の手を握り引つ張っていた。彼はことあるごとに断ることなく平気で梨奈の手を握った。それについて、もはや梨奈はなんの疑問も抱かなくなっていた…。

「ほら、これこれ」

ゲームセンター内の、あるものの前でレオンは立ち止まった。こういう場所に疎い梨奈でも、

それがなんなのかはさすがに知っていた。

「え…」

それは、プリクラの筐体だった。

「今日の記念に二人で撮ろう、梨奈ちゃん♪ほら」

「ああっ、ちよっ、ちよっと待ってレオンくん！」

家族にバレる危険のあるものを、わずかたりとも残したくない梨奈としては、当然断固拒否すべき提案だった。だが、レオンは梨奈のそんな気持ちなど知らず、プリクラ機のカーテンの中へずんずん彼女を引っ張っていく。

「えーっと、これどうすんだっけか…」

目の前の画面に二人の顔が映っている。レオンは早速撮影すべく操作していく。梨奈は慌てて彼を制止する。

「ダメ！ちよっ、ちよっと待って、レオンくん！おばさん、こういう写真が残るのはダメな

のよ、ほら、もし家族に見られたりしたら、ね
…」

「えー、大丈夫だよ。別にネットにあげたりしないし。俺が持つてるだけだからさ」

「で、でも…方が一つてこともあるし…」

「いいじゃん！お願い！俺どうしても梨奈ちゃん
とプリクラ撮りたいんだよ！お願い！頼
むよ、梨奈ちゃん！この通り！」

「えー…も、もう…レオンくんったら…あは
♪」

毅然として拒絶すべき、シリアスな場面のは
ずだった。だが、冗談めかして両手を合わせて
頭を下げるレオンを見て、梨奈は思わず吹き出
してしまう。そしてなんだか楽しい気分になっ
てきて、絶対いけないはずなのに、やっぱり別
にいいかな、なんて軽く考えそうになっ
てしま
うのだった。

（ああ！ダメダメ！いけないわ、そんなの！軽

はずみにプリクラなんか撮っちゃ…)

「ほら、もう撮るよ！」

「ああん！ちよつと、もう！や、やだあ！」

レオンは半ば強引に、撮影の手順を進めていってしまおう。

(……もう)

観念した梨奈は、無理矢理その場から去るようなことはしなかった。だが、プリクラを撮ってしまうことにはやはり抵抗がある。

「…か：顔は…隠させてもらいますからね…」
だから、彼女は自らの右手で目の辺りを覆って隠すことにした。例えそうしたところで、万が一夫に見つかれば簡単に自分だと特定されてしまうかもしれないのに。充分危険な行為には違いないのに。

専業主婦の田口梨奈は、夫以外の若い男とプリクラを撮ることを、自分の中で受け入れてしまっていた…。

「あはは！いいよ！なんだかその方がエロいし(笑)♪」

「もう…そんな…やだ…」

「ふふふ…じゃあ梨奈ちゃん、撮るよ」

そう言いながら、レオンは梨奈の肩を組むようにし、その体を自らの方に引き寄せた。

「あ…ゴクツ」

されるがまま、梨奈はレオンに体を密着させ、そして自分から彼の肩に頭を預けるようにした。

「……………」

音声、撮影の時を告げる。

「ああ、梨奈ちゃん。ちゃんとピースしなきゃ。

ピースピース。俺もしてるから。ほら、ピース！」

「あ…うん…ぴ…ぴ…す…」

梨奈は促されるまま、カメラに向かって左手でピースサインを作った。間もなく、カシヤツと、その瞬間を切り取る音が響いた…。

「ふふ、よく撮れてるな」

出来上がったシールを、レオンが手に取り梨奈にも見せてくれた。書き文字や加工もない、シンプルなただの写真だった。

「はあ…」

その中で、梨奈は夫ではない若い男性と仲睦まじく身を寄せ合い、二人してお揃いのピースサインを決めていた。

目の辺りは手で隠され、一見して誰なのかはわからない。しかし口元は覗いていた。

ピースしながら若い男とプリクラを撮る四十一歳のその女性の口元は、確かに笑っていたのだった。

嬉しそうに歪む顔を自ら隠蔽しようとして写真に映るその女性の姿は、レオンのいうようにエロいと、梨奈は素直に思った…。

※※※

「ほ：本当にいいの、梨奈ちゃん？こんな高そうなご飯奢ってもらっちゃって」

「いいのいいの。今日のお礼、おばさんの気持ちなんだから。ほら、若いのに変な遠慮なんてしないの」

梨奈とレオンは、日本料理店の個室のテーブルで向かい合っていた。高級料亭といってもいぐらいの店だった。見た目からして美しい料理が二人の間に並んでいる。普段レオンがつけるような食事では到底ない。

ママ活アプリを介しているとはいえ、今日は必ずしも梨奈がお金を出していたわけではなかった。今日の代価として金品を要求されたりもしていない。いわば今日は、普通のデートだったのだ。だからこそ自然な心境で、年長者と

してお礼をしたいと梨奈は思った。

「うん…じゃあ…いただきます…うん！美味い！やべえ！すげえ美味え！マジやべえ！」

「ふふふ…」

最初は戸惑っている様子だったレオンも、一度箸を伸ばすと滞りなく食べ出し、若者らしい形容で感動を表現する。その様子をとっても微笑ましく思いながら、梨奈は自分も箸を動かす。

本来なら、家に帰っているはずの時間だった。夕食は帰宅して家族と一緒に取ると、朝の時点では本当に思っていた。けれど梨奈は今、自分の意思で、目の前の彼と夕食を共にしていた。その理由は色々あったが、考えないようにした。今はただ少しでも長く、この仄かな幸せに浸っていたかった…。

「……………」

「…ねえ梨奈ちゃん…ちよつと聞きたいんだけどさ」

食べながら、レオンが訊いてきた。

「ん、なあに？」

「うん。梨奈ちゃんはさ…そもそも、なんでママ活なんてしようと思ったわけ？」

「え…」

ママ活、という単語を聞いて、不意にドキツとしてしまう。レオンが自然な雰囲気を作ってくれているからか、全然そんなことを意識せずに済んでいるけれど、今日のこれは、俗にママ活と呼ばれるもので間違いないのだった。

確実にそういう、不謹慎で不埒な行為なのだった…。

「う…うーん…」

梨奈は答える。今なら、彼になら、素直に言えそうな気がした。これまで誰にも言えなかった、自分の気持ちを…。

「お…おばさんね…その…自分で言うのもないけど…家ではすごく素敵なお母さん…を

…その…してるの…つ…務めてるの…せ…聖
母みたいって…主人からも言われるくらい…」

「うんうん…わかるよ…」

「でも…それが…おばさんの全てってわけじ
やなくて…なんていうかな…そういうお母さ
ん像が…きつと…その…窮屈だったのかも
…本当は…おばさん…聖母なんかじゃ全然な
くて…その…わ…若くてカッコいい男の子
…大好きだし♪」

「あはは！いいねえ！」

「うん…だから…ちよつと…息抜きしたかつ
たんだと思う…うん…もう…大丈夫…う
ん…今日は本当にありがとうね…レオンく
ん…本当に感謝してる…また明日から…おば
さん…ちゃんとお母さんを頑張るから…」

その言葉をもつて、梨奈はこの夢のような時
間を終わりにしようと決めた。こうして気持ち
を吐露することによって、なにか自分の中にス

ツキリしたものを得ることが出来た。

今日の記憶は自分の中に固く封印し、ママ活アプリもスマホから削除しよう。そう決心した。ところが。

「いやいや、なに言ってるのさ、梨奈ちゃん。ありえないでしょ？」

レオンはとても不思議そうな顔をして言うのだった。

「まだ肝心のことが残ってるでしょうが」

「え…」

その言葉に、思い当たる節はあった。でも、そんなはずはないと、内心で否定する。

「毎日真面目にお母さんするのが大変で、えげつないストレスが溜まってるとは？じゃあちやんと、それを思いつつ切り発散しないとダメじゃん？じゃないと逆に体に悪いよ、ね？」

「な…なにを…」

レオンは、梨奈の目を射抜くようにじっと見て言った。今までにない、真剣な表情で。

「梨奈ちゃん…この後ラブホテル行って、俺とエッチしよう」

「!!!!」

梨奈は愕然とする。まさかこんなにもはつきりと、直接的に言われるとは思ってもみなかった。

「そ、そんな…ダメよ…ダメダメ…そんなの…」
本当はひどく動揺しながらも、至って素っ気ない態度を装って拒絶する。

「おばさん…そんなつもりないから…今日そんなつもりで来たんじゃないから…か…家族もいるし…そんなのダメ…ありえない…」

「ふうん…そんなつもりじゃないねえ…じゃあ梨奈ちゃん…今日どんなパンツ穿いてきた？」

「へえ？」

レオンは畳みかける。

「どんなパンツを穿いてきたかによって、本当にそんなつもりなかったのかどうかはわかるからさ。どうなの？ねえ？…正直に教えてよ」

「……………」

卑猥な質問に、梨奈は正直に答えてしまう。

「…き…綺麗なシルクの…む…紫の…」

「あはは！それってき、そんなつもりガッツリある人が穿いてくるパンツなんじゃないの？今日若い男に抱かれるかもしれないって思ってるお婆さんが穿くパンツでしょ、それ？」

「そ…そんなこと…」

「無理しなくていいって。自分に正直になりなよ。梨奈ちゃんはきつと初めから、それを望んでいたはずだよ。ママ活アプリを始めた時からね」

「はあ…」

「大丈夫。ただのお礼だから。梨奈ちゃんがご

飯奢つてくれたように、俺も梨奈ちゃんにサーブスしてあげたいんだよ。いーっぱい気持ち良くしてあげて、お母さんの欲求不満を解消してあげたいの」

「はあん！んん！」

「梨奈ちゃん：俺とエッチしよう」

レオンはもう一度、梨奈の瞳をしつかりと見据えて言った。その貫くような強い目力に、梨奈は思わず俯いてしまう。

「はあ……ゴクッ」

様々な葛藤が、梨奈の中に渦巻いた。妻として、母としての正義。自分の、本当の気持ち……。色んな概念が、四十一歳の一人の女の中で激しく格闘した。

そして梨奈は……途中で考えることを放棄した。

顔を上げて、レオンを見る。その表情には無意識の内に、露骨に男に媚びる女のいやらしい

微笑が貼りついていていた。

梨奈は言った。ものの二、三分前、金輪際こ
ういうことはやめて普通のお母さんに戻ると、
固く決心したはずなのに…。

呆気なく、言った…。

「…うん…：わかったわ…エツチしましよ、レ
オンくん♪…おばさんをラブホテルに連れて
って♪」

「あは！いいねえ！じゃあ早速キスしよう、梨
奈ちゃん♪」

「ええっ！こ、ここで？」

「うん、ここでここで！ほら、早く、キスキス
♪」

レオンは立ち上がって前方に身を乗り出し、
テーブルの向かいに座る梨奈を急かす。

「ええ…：もう…：はあ…：わかったわよ…：」

梨奈も立ち上がり、彼と同じようにテーブル
の上に身を乗り出し、顔を彼の方に近づけてい

く。手は使わず、二人の唇だけが、高級料理が所狭しと並ぶ上の空間で触れ合う。

「ん：ちゅっ」

「くちゅ：ちゅっ：んん：」

閉ざされた日本料理店の個室で、お母さんは夫ではない若い男性と、口づけを交わした…。

※※※

「お父さん、お母さんはまだなの？」

「もえちゃんも！もえちゃんもお母さんに会いた〜い！」

「もうすぐ帰ってくると思うから、な？もうちよつとだけ待ってくれよ、二人とも：はあ」

田口進次郎は、思わずため息を漏らす。家族三人で、妻が用意しておいてくれた夕食のカレ

ーを食べていた。今日一日、進次郎は二人の子供の世話を張り切り、それなりに頑張っているつもりだったが、子供達にとっては、自分などでんで眼中にないようなのだった。残念ながら、父親とはえてしてそういう損な役回りなのかもしれない。

(…にしても遅いな…梨奈のやつ…)

ゆっくりしてきてほしいと言いながら、いざ遅くなると不安になるのも身勝手な話だが、それが正直なところだった。律儀な妻のことだから、なんだかんだで、夕食までには帰ってくると思っていたのだ。

(まあ…古い友達と会うって言ってたからな…久しぶりに会って、積もる話もあるんだろう…女同士は話し出したら止まらなくなるところがあるし…)

「あつ、これから萌夏！口の周りにカレーがべつとり付いてるじゃないか…なにしてるんだ

よ、もう…ほら、お父さんが拭いてあげるから」
「うう〜」

内心で早く帰ってきてほしいと願いながら、
進次郎は今日の自分の役目に従事する。

今、妻が本当はなにをしているかなんて、彼は知る由もなかった…。

※※※

同時刻…。

「ぢゅぷじゅぷじゅるじゅぷぢゅぷうう
う！んんっ！べろべろべろべろべろべろ！れ
ろれろぢゆるぬぽっべろんべろんべろんべろ
んべろおおおおん！」

田口進次郎の妻、田口祐輔と田口萌夏の母、

田口梨奈は、今日初めて会った若い男のチンポ

をしやぶっていた。それも獣のような激しさと見境のなさで…。

ラブホテルの一室。梨奈はベッド脇の床に膝を着き、床に直立する全裸のレオンの股間に顔を埋めていた。上下下着だけになり、紫のシルクの見るからに高価そうなそれを惜しげもなく晒している。実は今日初めて身に着ける、まっさらの新品だった…。

「あは！梨奈ちゃんってば激しい！性欲溜まりすぎでしょ？お母さんの欲求不満ってすごいんだね(笑)♪ははっ、やべ、超気持ち良い！」
「じゅるえろれろれろ！じゅぽっ！じゅぽっ！じゅぽっ！じゅぽっ！ずぽっずぽっ！ずぽっずぽっ！ずぽっずぽっ！ずぽっずぽっ！」

梨奈は大きく開いた口に放り込んだチンポを、顎を前後させることによって執拗に摩擦する。一見彼を気持ち良くさせるための献身的な行為のようで、実は梨奈自身はその肉の味わい

をがむしやらに楽しんでるだけだった。

レオンの揶揄に、梨奈はとても反論することが出来なかった。ラブホテルに入り行為に及ぶに至り、彼女の中でなんらかのタガが外れ、みっともないほど野性的に、純粹な肉欲に溺れてしまっていた。

（はあ…すごい…これ…お…お…オチンチン
…若い男の子の…オチンチン…ああ…すごい
…硬くて…濃い…味が…すんごく濃い…若い
…本当に若い…はあ…もつと…もつともつと
味わいたい…）

レオンのチンポは、はち切れんばかりにギンギンにいきり立ち、なにか畏怖さえ感じさせた。サイズが特別大きいというわけではなかったが、その硬さは出色で、少なくとも、もう最後に触れたのが何年前かわからない夫のそれよりかは、遥かに雄々しく逞しいと断言出来た。「べろべろ！んんっ！じゅぷれろえろれろ！」

(すごい：本当にすごい：若いエキスが：お
：オチンチンからどんどん溢れてくるみたい
：はあ：美味しい：すんごく美味しい：若い
男の子の：若い：男の味：はあ：若いオチン
チンの味：)

その硬く焼けるように熱いチンポは、蠱惑的
な『若さ』を迸らせていた。梨奈はその『若さ』
に、おかしくなるほどに魅了され、魂を抜かれ
たみたいにチンポに惹きつけられずにはいら
れなかった…。

(はあ：硬い：本当に：すんごく硬いわ：は
あ：オチンチンって：こんなに硬くなるもの
なの？：若い男の子のオチンチンって、こうい
うものなのかしら：昔のあの人はどうだった
っけ？：はあ：もう覚えてないけど：ああ：
すごい：若い男の子のオチンチンって本当に
すごい：ああ：好き：私：この若いオチンチ
ン好き：はあ：もう大好きよ：ああ：すご：

ああ：でも：それにしても：)

恍惚の口淫に耽溺しつつも、梨奈の胸に、ふと湧き上がってくる素朴な疑問があった。

「じゅぷっ！れろれろえろえろ！べろべろべろじゅぽぬぽぬぽぬぽぽっ！」

(わ：私って：こんなに：え：エツチだったかしら？)

いくら彼の若いチンポが魔性の力を持っていても、梨奈は自分でも啞然とするほどに躊躇なく遮二無二それにむしゃぶりついていたのだった。ひよっとしたらこういった展開が待っているかもしれないとは正直思っていた。けれど決して率先して不倫するつもりなどなかったし、家族を裏切ることとは絶対的な悪なのだという一定の倫理観は持ち合わせているつもりだった。

「ああ！べろべろ！べろべろべろんべろんべろんべろんべろんおおおおおん！」

（はあ！オチンチンオチンチンオチンチン！
若い男のオチンチン！好き好き好き！若い男
のオチンチンだいだいだいだいすきいい
いい！！！）

ところが、今の梨奈にはそんな真つ当なお母
さんの面影などまるで残っていないのだった。
大柄だが、黒髪ロングヘアの典型的な優しそ
うな見た目の、まるで聖母のようなお母さんは、
家族のことなんて忘れて一心不乱に若い男の
チンポに食らいついていた。

もう、認めないわけにはいかなかった。

（…ああ…うん…エッチだった…私って…は
あ…ゴクツ…すんごく…もうすんごくエッチ
だったんだ…はあ…そう…そうよ…エッチだ
から…私は…田口梨奈は…せ…専業主婦で…
二人の子供のお母さんの田口梨奈四十一歳は
…もうすんごくエッチでエッチで…エッチで
エッチでエッチでエッチで…エッチすぎるか

ら：はあ：だから：ママ活アプリ始めたんだ
：きつと：初めから：若い男の子とエッチが
したくて：若い男の子とエッチするため：
そのためにママ活アプリ始めたんだ：きつと
そうなんだ：私：そうだったんだ：ああ：

それは無意識裏のことかもしれない。けれど、
さつきレオンがからかい半分に指摘したこと
は、きつと純然たる真実なのだろうと、梨奈は
素直に思った：。

「んん！ぢゅぷれるえろれる！ぢゅぱぬ
ぱぬぽぬぱぢゆるちゅぽぽっ！」

（ああ！そう！そうそう！きつと最初か
らこれを求めていたのよ！これを！このオチ
ンチンを！この若くてかったあゝゝいオチ
ンチンを！）

なにか吹っ切れた梨奈は、さらに迷いなく口
淫に臨む。狂ったように舌を振り回して下品に
唾液を飛び散らせ、肉塊を啜っては口内のあら